

中世における牛玉宝印の料紙について

富 田 正 弘

はじめに

牛玉宝印は、寺社の修正月会や修二月会などの新年の予祝行事において給付される護符の一種であり、転じて起請文の料紙などにも用いられた。筆者は、別稿において東寺百合文書に残されている中世の起請文の料紙に転用された牛玉宝印の損傷状況を検討した結果、これらは悉く一旦護符として使用された牛玉宝印を探してきて、たとえ損傷があってもこれを起請文の料紙として使用したことを指摘してみた。しかし、近世においては、中世のように護符として使い古した牛玉紙（以下、牛玉宝印の料紙を「牛玉紙」と称することにする）ではなく、はじめから起請文を書くためにこれを調達したのではないかと推測した。そして、起請文に牛玉紙が用いられた理由は、起請文が直接ないし間接的に神仏に充てる文書であることに求められるとした¹⁾。しかし、起請文の料紙は全て牛玉紙に書かれるわけではなく、その理由については今後の課題とした。また、その考察においては起請文料紙に転用する牛玉紙の損傷状況について検討しただけで、護符としての牛玉紙の紙質そのものについては述べるができなかった。

また、筆者はさらに別の稿²⁾において、經典や勸進帳などの神仏が発給するとみなされる文書には、普通の素紙（白紙）は用いず、何らかの加工紙・装飾紙に書かれる法則性があることを指摘した。本稿では、上の牛玉宝印が神仏から発給する形をとるとすれば、どのような料紙に刷印（手書きのものもある）されているのか、その紙

質そのものを検討し、何故にこのような紙質を有しているのかその意味を考えてみたい。

1 東寺百合文書現存の牛玉宝印料紙と紙質調査法

現在東寺百合文書に残されている牛玉宝印の料紙は、60 通の起請文料紙に転用された 65 枚の牛玉紙である。牛玉宝印が発行された日付がわかるものは、建武 2 年（1335）正月 1 日に配布された木版刷の熊野山宝印のみであり、これはその 11 年後に貞和 2 年（1346）9 月日沙弥蓮性等連署起請文の料紙に転用されている³⁾。そのほかの牛玉宝印は明確な配布日が明らかではないが、護符として配布され使用された後の間もない時期に起請文料紙として使用されたものと考えられる。したがって、その配布日は、起請文の日付を 1 年ないし十数年遡るものと考えられる。

ここでは、近似値として起請文の日付をもって牛玉紙の配布された時期とみなして論を進めることにする。東寺百合文書に現存する最も古い牛玉紙は、正安 4 年（1302）の太良庄百姓僧嚴円等連署起請文の料紙に転用された木版刷の熊野山宝印であり、最も新しい牛玉紙は、天文 23 年（1554）の宝厳院祐重起請文の料紙に転用された木版刷御影堂宝印である。これを時代別にみると、鎌倉時代 2 枚、南北朝時代 29 枚、室町時代（明応 2 年（1493）まで）32 枚、戦国時代 2 枚となる。東寺に残る牛玉紙は南北朝・室町時代のもものが中心である。

つぎに 65 枚の牛玉紙を種類別に集計すると、

東寺から配布する牛玉宝印は、御影堂牛玉宝印が 23 枚（うち木版刷 15、手書 8）、教王護国寺牛玉宝印が 2 枚（手書）、千手堂牛玉宝印 1 枚（手書）、夜叉神牛玉宝印が 2 枚（手書）で、合計 28 枚（うち木版刷 15、手書 13）である。御影堂宝印が木版刷になる最も古いものは、永和 4 年（1378）の性実起請文に使われているものであるが、それ以前の御影堂宝印は全て手書であり、それ以後は全て木版刷である。したがって、このころに御影堂宝印の版木が作られたと考えられる。また、教王護国寺・千手堂・夜叉神の牛玉宝印は、中世を通じて版木はなく、東寺執行が筆で手書していたと思われる。

東寺以外の寺社が発行している牛玉宝印は、熊野山宝印⁴⁾が 21 枚（全て木版刷）、那智瀧宝印が 2 枚（木版刷）、金峰山宝印 4 枚（全て手書）、鞍馬寺宝印 3 枚（全て手書）、あとは木版刷の八幡新宮宝印・彦山宝印が各 1 枚、手書の根本中堂宝印・日吉七社宝印・善通寺・珍楽寺・福田寺宝印が各 1 枚があり、合計 37 枚が残されている。熊野山宝印は鎌倉時代のものからすでに木版刷であり、その古さが窺われる。東寺百合文書現存のものでいえば、室町中期の長祿 3 年（1459）に木版刷那智瀧宝印が現れる以前から多く使用されている⁵⁾。ただし、これらの熊野山宝印・那智瀧宝印には、相田二郎が指摘する烏点の文様が書かれたものは一つもない⁶⁾。このほかに木版刷のものは八幡新宮宝印と彦山宝印のみであり、中世では熊野三山のように大量に印刷して広く牛玉宝印を配るというようなことが少なかったであろう。以上の牛玉宝印を牛玉宝印種別・時代別に集計すると、表 1 東寺百合文書現存牛玉宝印種別時代別集計のとおりである。

筆者は、最近京都府立総合資料館の好意により、以上の東寺百合文書現存の牛玉紙合計 65 枚について、その紙質調査をさせていただいた。そ

の結果は、表 2 東寺百合文書現存牛玉宝印紙質調査結果のとおりである。その内容については、次節以下で述べるが、まずこの表の項目の意味を説明することによって、その調査方法と調査の意義を述べておきたい。

「起請文日付」及び「起請文名」は、牛玉宝印がその料紙として転用されている起請文の日付及びその名称である。前述のように牛玉宝印は発行日がわからないものがほとんどであるが、発行ののちの数年のうちに起請文料紙に転用されたものと考えられるので、「起請文日付」が牛玉宝印発行年の近似値と看做した。「西暦」は「起請文日付」のうちの和年号の西暦換算値である。「番号」は東寺百合文書の文書番号で、例えば「お 7」とは「お函 7 号」であることを示す。「刷書別」は牛玉宝印が木版刷であるか手書きであるかの別、「牛玉社寺」は牛玉宝印を発行した寺社名を示した。「紙種」は調査の結果として筆者が判定した牛玉宝印の料紙に使われている紙の種類の名称である。

以下の項目は、牛玉宝印の料紙の計測・観察の結果である。「縦」・「横」・「厚」・「重」は、それぞれ縦寸法（単位 mm）・横寸法（単位 mm）・厚さ（単位 mm）・重さ（単位 g）である。ただし、裏打修補されているものの厚さは、裏打を含む数値から裏打紙相当と思われる数値を引いたもので、正確なものではなく、参考値として載せている。また、裏打修補及び続紙のものの重さは裏打紙を含む重さ及び続紙全体の重さを案分しているため、これも参考値に過ぎない。「比率」は「横」を「縦」で割って得た計算値で、縦横の比率を表す。「密度」は、重さ÷（縦寸法×横寸法×厚さ）の計算式により求めた比重で、紙の繊維の詰まり具合すなわち堅さを判断するバロメーターでもある。

「簀数」は紙の表面に着いた簀目の 1 寸当たり

の本数で、15～18 本ぐらいを境として、少ないものは萱簀、多いものは竹簀でもって漉かれたものと考えられる。「簀目」は、簀目の目立ち具合と、簀目が紙の表裏どちらにあるかを示した。目立ち具合は、「顕著・僅か・透視・微か・不詳」の順位であり、簀目の裏表は起請文の字面の裏表を示した。すなわち、牛玉宝印から見れば表裏が逆になっている。「糸数」は漉簀の簀を編んでいる糸の痕の幅である(単位 mm)。「糸目」は糸目の目立ち具合で、やはり「顕著・僅か・透視・微か・不詳」の順位である。「板目」は、漉き上げた紙を乾燥する際に板に干すことが多いが、その板面が当たった面が裏か表か、また板の木目が紙の表面に着いている程度を「顕・微」で表示した。この表裏も起請文の字面から見た表裏を示す。紙の光沢のある方や簀目が押し潰されている方が板目の面である。板の木目が顕著な紙は、古い干し板を使用しているものであるから、品質は粗悪なものが多い。

「繊維」は原料の繊維の種類を、「楮」単独、「楮斐」交り、「楮桎」交り、「楮竹」交りの別で示した。「切断」は繊維の叩解前に繊維切断の工程を行っているかどうかを示した。「切断」と記載されているものが切断を確認できたものであるが、何も記載されていないものも、確認しなかっただけで、ほとんどの紙の繊維が切断されているといってよい。繊維を叩解するに先立ち、白皮の原料を 5mm 以下に切断するもので、これによって長さ 15mm 程度である楮の繊維が 5mm 以下になり、肌理の細かい紙ができる。切断の判定方法は、繊維束を観測し、繊維束が 15mm 以下で、切断面があれば切断されていると判断できる。

「米粉」は填料として米粉が入っているかどうか、その程度を「多・有・少・無」の段階で示した。「白土」は填料として白土が入っているかどうか、これも米粉と同様に「多・有・少・無」の

段階で示した。米粉や白土を填料として加えると、紙をより白く柔らかくする効果があるが、粗悪な紙を少しでも良く見せる効果もある。「瑕疵」は原料の繊維に折曲・損傷・混在・墨付や藍染め繊維や紙片の混入などの瑕疵があるかどうか示した。「米粉」から「瑕疵」までは、料紙にライトパネルから透過光を当て 100 倍の顕微鏡で観察した。「打紙」は、紙を堅くして滲め止めや平滑化を企むために打ち固める作業で、その度合いを「強・有・軽・無」の順で表示した。「染色」は染紙されているかどうか、「丁子染・黄蘗染・有・無」の別を表示した。

これらの調査項目のうち、「簀目」「糸目」「板目」「米粉」「白土」「打紙」などの顕・微や多・少の程度については、かなり主観的な判断に依拠している。将来、これらを数値化するなど、より客観性を高めることが今後の課題である。

2 牛玉宝印料紙の質量

東寺百合文書に現存する牛玉宝印の紙質について、前節で縷々述べた方法によって調査すると、表 2 のような調査結果を得た。本節以下では、この表のデータに基づき調査結果を略述してみたい。

黒川直則は、かつて東寺に伝来した起請文全てを検討し、起請文 277 通のうち牛玉宝印に書いたもの 88 通を確認し、起請文に使用されている牛玉宝印の種類、東寺寺内の牛玉宝印の作成・給付のされ方、その牛玉宝印の起請文料紙への使われ方などについて論及している⁷⁾。しかし、牛玉宝印の紙質そのものについては、「杉原紙」・「檀紙」・「雑紙」などの史料にみえる名称を指摘するにとどまり、それがどのような紙質でどのような性質の紙であったかまでは追究してはいない。

黒川が指摘する牛玉宝印の紙質を確かめるに

先立ち、まず表 2 のうち、その質量（縦横寸法・比率・厚さ・重さ・密度）について検討を加えておきたい。この調査結果によれば、東寺に現存する牛玉宝印の縦寸法の平均値は 291mm（最大値 338mm、最小値 246mm）、横寸法の平均値 433mm（最大値 514mm、最小値 320mm）、縦横比率の平均値が 1.49（最大値 1.73、最小値 1.25）、厚さの平均値 0.13（最大値 0.20、最小値 0.07）、重さの平均値 5.6g（最大値 10.2g、最小値 2.6g）、密度の平均値 0.35（最大値 0.58、最小値 0.25）である。平均値の外に最大値と最小値も書き添えてみた。縦寸法・横寸法・縦横比率・重さ等の最大値と最小値の格差が非常に大きい、これは時代差による違いではなく、牛玉宝印を配布する寺社の別や起請文料紙への転用の際の切断などに起因しているようである。

そこで、これらの東寺百合文書に現存する牛玉宝印の類の質量を、中世の牛玉宝印以外の文書の質量と比較し、また近世の牛玉宝印の質量とも比較して、中世の牛玉宝印の質量的な概観をおさえておきたい。比較の対象としては、手許に材料のある東寺百合文書に現存する室町幕府奉行人奉書の群類と、近世の薩摩藩に提出された琉球国王・摂政・三司官の起請文に使用された牛玉宝印の群類を撰んでみた。これらと比較するために作成してみたものが、表 3 文書群別料紙質量データ比較である。

表 3 のうちの「A 百合文書起請文」は、東寺百合文書に現存する 65 枚の牛玉宝印料紙全体の群類の数値、「B 御影堂宝印」は東寺百合文書に現存する牛玉宝印のうち 23 枚を数える東寺御影堂の修正会で配布される御影堂牛玉宝印の群類の数値、「C 熊野山宝印」は同じく東寺百合文書に現存する 23 枚の熊野山宝印（那智瀧宝印を含む）の群類の数値である。B 御影堂宝印も C 熊野山宝印も他の牛玉宝印よりも比較的大きめのもの

であるが、この両者にも多少の違いがある。「D 百合奉行人奉書」は東寺百合文書に現存する堅紙の室町幕府奉行人奉書 54 通の数値⁸⁾、「E 百合奉行紙質調査」は東寺百合文書に現存する堅紙及び折紙の室町幕府奉行人奉書のうちで過去に料紙調査の対象とされ、データが採れている 9 通分の数値である。この両者は、前者が永和 2 年（1376）から永禄 2 年（1559）までの 180 年間余の室町期全般にわたるものであるのに対し、後者は享徳 3 年（1454）から永正 7 年（1510）までの 60 年間弱の室町中期に限定されるものであり、その分布期間に相違があるため数値にも相違がみられる。この室町幕府奉行人奉書は、その料紙に中世の杉原紙が用いられる文書であるから、中世の牛玉宝印の紙質と比較するにはふさわしい文書群類である。「F 琉球国起請文」は島津家文書に現存する琉球国起請文のうち今回急遽調査した 24 通の数値である⁹⁾。これは寛文 10 年（1670）から文化 9 年（1812）までの 140 年間余のものである。この起請文の料紙には、熊野山宝印と那智瀧宝印が使用されており、C 中世の熊野山・那智瀧宝印との比較をするには恰好の資料といってよい。この表 3 の項目としては、「縦」が縦寸法、「横」が横寸法、「比」が縦横比率、「厚」が厚さ、「重」が重さ、「密」が密度を示し、数値はそれぞれ平均値・最大値・最小値を示した。

まず第一に、質量のうち縦寸法・横寸法・縦横比率について考えてみよう。東寺百合文書に現存する牛玉宝印全体（A 百合文書起請文）、そのうちの B 東寺御影堂宝印、および C 熊野山・那智瀧宝印の中世の三つの牛玉宝印群同士を比較してみると、縦寸法の平均値では A が 291mm、B が 300mm、C が 291mm である。B 御影堂宝印が A 全体の平均より約 1cm 大きく、C 熊野山・那智瀧宝印は A 全体の平均と同じ値である。横

寸法の平均値をみると、A が 433mm、B が 483mm、C が 411mm である。B 御影堂宝印が A 全体の平均より 5cm 大きく、C 熊野山・那智瀧宝印は A 全体の平均よりも 2cm 以上、B 御影堂宝印より 7cm 余も小さい。おそらく、C 熊野山・那智瀧宝印は、起請文料紙に転用する際に端裏部分の銘文などを 5cm ぐらいいは切り落として使用している可能性がある¹⁰⁾。これを縦横比率で確認すると、A が 1.49、B が 1.61、C が 1.41 である。B 御影堂宝印が A 全体の平均よりやや横長であり、C 熊野山・那智瀧宝印は A 全体の平均よりもやや縦長になっている。一般に文書料紙の縦横比率は、中世は黄金比 1.6、近世は白銀比 1.4 であるとされるが、B 御影堂宝印は黄金比であるから中世の文書に応じた比率であるのに対し、C 熊野山・那智瀧宝印は中世のものとしてはその比率が小さ過ぎ、これによっても横寸法が余分に切除されている可能性が確かめられる。

つぎに、A～C の中世の起請文料紙である牛玉宝印群と D～E の中世の杉原紙を料紙とする室町幕府奉行人奉書群とを比較してみる。「D 百合奉行人奉書」および「E 百合奉行紙質調査」での縦寸法の平均値は、D が 286mm、E が 278mm であり、室町中期のみの E が、室町期全般に亘る D よりも約 1cm 近く縦寸法が短くなっている。これらの数値は、B 御影堂宝印より 1.4～2.2cm も短く、C 熊野山宝印に比べても 0.5～1.3cm ほど短い。また、横寸法の平均値をみると、D が 472mm、E が 466mm である。E の平均が D の平均よりも約 0.6cm 横寸法が短くなっている。中世後期には横寸法においても小さくなる傾向が確認される。これらの数値は、B 御影堂宝印よりは 1.1～1.7cm 短く、C 熊野山宝印よりは 6.1～5.5cm 長い。このことから、C 熊野山宝印はともかく B 御影堂宝印は、質量的には室町幕府奉行人奉書の杉原紙に近い数値、あるいはこれをや

や上回る数値を示しているといえる。また、C 熊野山宝印においても、起請文の料紙に転用されるときに横幅を比較的多めに切断していると考えれば、起請文料紙転用前の質量はおそらく室町幕府奉行人奉書と同じか、それをやや上回る質量を備えていたともいえる。さらに、縦横比率の平均値をみると、D が 1.65、E が 1.68 である。いずれも中世文書の縦横比である黄金比を上回っており、したがって B の 1.61、D の 1.41 という数値よりも高めである。しかし、A～C の中世の牛玉宝印群と D～E の中世の室町幕府奉行人奉書群との縦横寸法や比率の相異が、もし A～C の牛玉宝印群が起請文の料紙に転用された時の切り落としが原因であるとするならば、転用前における牛玉宝印料紙の縦横寸法は、室町幕府奉行人奉書に使われている杉原紙と同程度であったと考えてよいのではあるまいか。

質量の比較として最後に、A～C 中世の牛玉宝印群と F の近世の琉球国起請文の牛玉宝印群とを比較してみる。表 3 の F 琉球国起請文の牛玉宝印群は、縦寸法の平均が 225mm、横寸法の平均が 291、縦横比率の平均が 1.29 である。近世における文書の縦横比率は、白銀比 1.4 程度といわれるからこの値は少し小さい。縦が 225mm であるとすれば、横はその 1.4 倍であるから、近世の紙ならば 315mm なければならない、それよりも 2.4cm は短い。おそらくこれも、起請文の料紙に転用した時に端裏部分を切除したものではなかろうか。それはともかく、縦寸法は、A 百合文書起請文や C 熊野山宝印などよりも 6.6cm、B 御影堂宝印よりも 7.5cm も短い。横寸法についても、A 百合文書起請文よりも 14.2cm、B 御影堂宝印よりも 19.2cm、C 熊野山宝印よりも 12cm 小さいのである。F 琉球国起請は近世の熊野山宝印か那智瀧宝印であり、C 熊野山宝印は中世の熊野山宝印か那智瀧宝印である。したがって熊野牛

玉宝印だけを比べてみても、中世から近世に至ると縦横ともかなり小さくなっていることが確認できる。そこで、仮に F 琉球国起請文の牛玉宝印群の横寸法を縦寸法に変え、縦寸法の 2 倍の数値を横寸法にしたらどうであろうか。計算してみると、縦は 291mm、横は 450mm となるから、この数値は A 百合文書起請文の平均値の縦 291mm 横 433mm、D 百合奉行人奉書の平均値の縦 286mm 横 472mm にほぼ近い値となる。近世には杉原紙を縦に二等分した長方形の縦横を入れ替えた大きさの半紙が使われはじめるが、まさに A 百合文書起請文や D 百合奉行人奉書の杉原紙が全紙だとすれば、近世の牛玉宝印は半紙を用いているということができるのである。

つぎに、質量のうち厚さ・重さ・密度について考えてみる。「A 百合文書起請文」、そのうちの「B 御影堂宝印」そして「C 熊野山宝印」の 3 者を、表 3 のデータに基づき比較してみると、厚さの平均値では A が 0.13mm、B が 0.13mm、C が 0.14mm である。C 熊野山・那智瀧宝印→A 百合現存全体平均・B 御影堂宝印の順の厚さであるが、その差はわずかで、ほぼ同じ厚さと言ってよい。重さの平均値をみると、A が 5.6g、B が 5.9g、C が 6.1g であり、これも C 熊野山・那智瀧宝印→B 御影堂宝印→A 百合現存全体平均の順の重さである。C と B では 0.2g の差で殆ど同じであるが、B・C 以外の牛玉宝印はやや軽いという結果である。密度の平均値をみると、A が 0.35、B が 0.32、C が 0.39 であり、これは C 熊野山・那智瀧宝印→A 百合現存全体平均→B 御影堂宝印の順の単位当たりの重さである。密度は原料の繊維や填料によって異なるが、紙打ちの強弱によって最も影響を受けるので、その反映であるとも考えられる。

また、A～C の中世の牛玉宝印の料紙と E 室町奉行人奉書の料紙とを比較してみる（D 奉行人

奉書は厚さ・重さ・密度の計測・計算をしていないので考察の対象外とする）。E 室町奉行人奉書の料紙の厚さの平均は 0.15mm、重さの平均は 4.6g、密度の平均は 0.23 である。厚さでいえば、E 室町奉行人奉書は、中世の牛玉宝印のうち最も厚手の C 熊野山宝印よりも 0.01mm 厚いが、その差はわずかでほぼ同じといってよい。重さは A～C のうちで最も重い C 熊野山宝印より 1.5g（約 4 分の 3 の重さ）、最も軽い A 百合現存全体平均よりも 1.0g 軽い（約 5 分の 4 の重さ）。密度の平均でいうと、A～C の牛玉宝印の約 3 分の 2 の単位当たりの重さしかない。つまり、奉行人奉書の料紙である杉原紙よりも、中世の牛玉宝印の方が繊維の目が詰まっていて堅いということができる。これは、牛玉宝印の料紙が杉原紙とは異質の紙であるか、または杉原紙であっても紙打ちされているということを示している。

さらに、A～C の中世の牛玉宝印の料紙と近世の F 琉球国起請文の料紙とを比較してみたいが、残念なことにこれらは前文 1 紙と罰文 8 紙ぐらいの牛玉紙とを継いだ形態なので、牛玉紙 1 紙分の重さが計測できず、したがって密度の計算もできなかった。厚さの平均だけを示せば、0.08mm である。この数値は、C 中世の熊野山宝印の料紙の半分に近い薄さであり、A 百合現存全体平均の 3 分の 2 の薄さである。

以上、中世の牛玉宝印料紙の質量についてまとめておくと、中世の牛玉紙は中世の室町奉行人奉書の料紙（杉原紙）に比べると、縦寸法はこれを上回るが、横寸法は相当に短い。これは牛玉紙が製作された時には杉原紙に匹敵した寸法であったものと考えられるが、起請文の料紙に転用された時に横幅部分は縦幅よりも大きな比率で切断されてしまった結果短くなったと考えられる。その証拠として、縦横比率でみると中世の文書の縦横比率 1.6 と同程度か、室町幕府奉行人

奉書の杉原紙の縦横比率 1.65～1.68 よりも少し低い数値になっている。厚さは奉行人奉書とほぼ同程度であるが、重さはこれを上回り、したがって密度もかなり高い。これも、中世の牛玉宝印料紙が室町幕府奉行人奉書料紙の杉原紙と異質の紙質であるか、あるいは杉原紙を紙打ちしたものであることを予想させる。また、中世の牛玉宝印と近世の牛玉宝印の質量を比べてみると、近世の牛玉宝印は中世牛玉宝印の縦で 4 分の 3、横で 3 分の 2 の大きさである。つまり、近世の牛玉宝印は、中世の牛玉宝印が杉原紙の全紙と同等の大きさだとすると、その半分の面積の紙である半紙に書かれたということが出来る。また、その縦横比率も近世文書の縦横比率 1.4 よりかなり低いものであるが、これも起請文料紙転用の際横幅が切り詰められた結果であろう。その厚さは、中世牛玉宝印の 3 分の 2 程度で、かなり薄手のものとなっていることもわかる。

3 牛玉宝印料紙の紙質

前節では東寺百合文書に現存する牛玉宝印料紙の質量について述べたが、この節ではその紙質について検討を加える。黒川直則は、前述の論文において中世東寺の修正会で配布される牛玉宝印の料紙について、史料上では「杉原紙」「檀紙」「雑紙」の 3 種がみえることを指摘している。

これらの紙種のうち、「杉原紙」については、中世を代表する書状料紙と考えられるが¹¹⁾、確かに黒川が指摘するように、文明 15 年 (1483) の東寺執行日記には、千手堂修正において別当・導師・執行が「杉原牛玉」を配分された旨の記事がある。私見によれば、杉原紙は時代により紙質の変化が見られ、超時代的に一様な紙でない。しかし、竹簀で漉かれ簀目があまり目立たない柔らかめのもので、檀紙よりランクがひとつ落ちる紙である点では、時代を通じて変化がない。楮

を主原料にして漉き上げられる紙であり、鎌倉時代には非繊維物質の残存が少なくなく、これを隠すために米粉を適宜加えて白く柔らかめの紙質に仕上げていた。公文書としては手続文書としての御教書等にも用いられる。室町時代では、室町幕府奉行人奉書などのように非繊維物質の残存が少なくなるとともに、米粉をより多く加えた、白くて非常に柔らかい類も登場する。江戸時代には、非繊維物質の残存が殆どなくなり、米粉を多く入れた紙に変化するのである。そして、江戸の杉原紙を大きく厚くし、良質化したものが奉書紙にほかならない¹²⁾。なお、湯山賢一は漉返紙に米粉が入っているものも、杉原紙と呼ばれていた可能性も指摘しているが、頷ける見解である。したがって、中世の牛玉宝印に用いられたという杉原紙とは、このような多彩なイメージをもち、かつ檀紙よりもワンランク格下の料紙と考えてよいであろう。

牛玉宝印に「檀紙」が使われていることについては、黒川は具体的な史料を提示していない。別に「檀紙」を料紙としたものがあってもいいとは思いますが、筆者は現存している実物において檀紙を料紙とした牛玉宝印は確認していない。檀紙は、萱簀で漉かれるため簀目が目立ち、大きく厚く、公文書としては公驗等に用いられる点は、時代を越えて一様ではあるが、やはり時代によって紙質にやや変遷があり、名称にも変化がみられる。鎌倉時代には檀紙と呼ばれ、非繊維物質の残存が少なく、念のためのように少量の米粉を加えた、白く優雅でありながら、大きく厚くかつ松皮襷をもつ紙であった。南北朝期から室町期にかけては、非繊維物質を大量に残し、米粉を全く加えない料紙が現れ、檀紙と同じ公驗文書に使用される。これは、黄ばんだ簀目痕や松皮襷をもつごわごわした強紙で、強杉原と呼ばれる。戦国時代には、強杉原の非繊維物質が少なくなり、

強紙の腰が少し弱くなるといわれるが、米粉は全く加えられない点は室町期と同じである。桃山時代の豊臣秀吉の時代から、この強杉原の高（縦寸法）を 1.5 倍の大きさにした大高檀紙が使用され始める。江戸時代の大高檀紙は、非繊維物質を全く残さない純白の繊維のみで漉き上げ、極上の紙へと変化する。しかし、萱簀で漉くため簀目が目立ち、大きく厚い公験に用いる料紙という点では、時代を越えて変わらない。そのために、鎌倉～南北朝期の檀紙、南北朝期～戦国期の強杉原、桃山期～江戸期の大高檀紙は、広義の檀紙類と看做されるようになった¹³⁾。

「雑紙」については、黒川は東寺執行日記の弘治 2 年（1556）正月 10 日条の記事「十日、夜叉神修正在之、牛玉雑紙ニテ廿余枚書テ出也」を引く。すなわち、正月 10 日の夜叉神修正においては、東寺執行が 20 数枚の夜叉神牛玉宝印を「雑紙」に手書きして発給しているのである。それでは、「雑紙」とはどのような紙であろうか。牛玉宝印の料紙は、神仏が出す護符であるから、經典・願文・勸進帳・都状や天皇文書のように特殊な紙に書かれるはずである。にもかかわらず、牛玉宝印が「雑紙」に書かれるということであるが、筆者にはそこになにがしか特別な意味が隠れているように思えてならない¹⁴⁾。上島有は中世文書の料紙分類の 1 つに「その他の雑紙」をあげ、「公文書の料紙よりは質の落ちる様々な料紙」と定義している。しかし、続けて「これらもその料紙を細かく調べてみると興味ある事実がみられると思うが、現段階ではこの程度の考察にしておきたい」¹⁵⁾と述べ、その考察を先延ばしているから参考にはならない。ここから先は、「雑紙」とは何か自分で考えていくしかないであろう。

そのためにはまず、東寺百合文書に現存している牛玉宝印の原本の料紙に当たって、中世の牛玉宝印の紙質が黒川の指摘するように「杉原

紙」や「雑紙」といってよいのかどうか検討してみるほかないであろう。表 2 のうち「繊維」という項目には、これらの牛玉宝印の料紙がどのような植物繊維で漉き上げられているか、繊維の種類を書き上げた。「楮」とは楮の繊維単独で漉かれていると思われるもの、「楮斐」とは楮の繊維と雁皮の繊維とが混在していると思われるもの、「楮極」とは楮の繊維と三極の繊維とが混在していると思われるもの、「楮竹」とは楮の繊維と竹の繊維とが混在していると思われるものである。このうち、「楮斐」「楮極」「楮竹」のように 2 種以上の繊維が混じっている紙は漉返紙の可能性が高い。竹紙は日本の前近代においては製作されていないから、竹の繊維は中国からの舶来した竹紙の反故が混入したと考えてよい。

表 2 のデータのうち紙質に関係する部分について、牛玉宝印の種類別に集計したものが、表 4 牛玉宝印種別紙質データ集計 I である。表 2 の「繊維」の項目に関わるデータ内容が、表 4 の集計では「楮」「楮斐」「楮極」「楮竹」の諸項目となっている。表 4 の集計をみると、楮単独で漉かれた牛玉紙が 38 枚、楮と雁皮と混じったものが 23 枚、楮と三極と混じったものが 3 枚、楮と竹と混じったものが 1 枚である。したがって、楮単独以外の 2 種以上の繊維が混じっている牛玉紙が 27 枚にのぼり、これらは漉返紙の可能性が高い。しかし、楮単独の繊維で漉かれた牛玉宝印の料紙も漉返ではないとは言い切れない。

また、表 2 の「瑕疵」の項目は、料紙原料の繊維に「折曲」・「損傷」・「混在」・「墨付」・「藍染繊維」の混入や「紙片」の混入などの瑕疵があるかどうかを示したものである。これらの瑕疵は、それぞれ「折」「傷」「混」「墨」「藍」「片」などの一文字の記号でデータとして示した。2～3 つの瑕疵がある場合は、これらの 2～3 文字で示される。これらのデータも牛玉宝印の種類毎に集計

し、表 4 の「折曲」「損傷」「混在」「墨付」「藍入」「紙片」「瑕疵」「疵無」の各項目に示した。「折曲」とは顕微鏡で料紙の繊維を覗いた時、多くの繊維が折り曲がっていることが確認できるものである。生漉きの料紙の繊維はほぼ真っ直ぐに伸びているが、何度も漉き返されている繊維はくたびれて折り曲がってしまうのである。このような折曲が確認できたのは全体 65 枚のうち 35 枚にのぼる。「損傷」とは、繊維が折り曲がるだけでなく、繊維が破れたり千切れたりして損傷しているものであり、これも生漉きの紙にはみられない。このように繊維が損傷を受けている牛玉紙は合計 12 枚を数える。

「混在」とは、さきにみたように料紙の原料の繊維が楮単一ではなく、2 種類以上混じっているものである。漉返の原料になる反故紙は、楮紙のものが圧倒的に多いが、なかには斐紙・三桎紙・染紙などの繊維が混じり、ときとして舶来の竹紙・唐紙の繊維と一緒に原料とするものがある。このように 2 種以上の繊維が混じっているものは、この例では既に述べたように「楮斐」「楮桎」「楮竹」の 3 種が確認できた。その合計は全体 65 枚のうちの 27 枚であった。「墨付」とは、文字が書かれた反故紙を漉き返す場合、墨の色を抜くため繊維をよく水洗いすることが行われる。しかし、それが充分行われない場合には、漉き返した紙に墨の付着した繊維が残る場合がある。このような墨付き繊維をもつ料紙は 4 枚ほど確認できた。

「藍入」とは、藍で染めた繊維が混入している料紙である。このように藍の繊維を入れる手法は、青味付けといって白い紙をより白く見せるために黄や赤の補色である青の繊維を加えるものといわれる。宿紙や漉返紙にもときおり見かける繊維であるが、上品の紙にも用いられることもあり、必ずしも漉返紙にだけ加えられるわ

けではない。これらの牛玉紙では、合計 4 枚ほど検出できたが、このうち 3 枚は表 2 のデータでは「折藍」「藍混」のように繊維の折曲がりや 2 種以上の繊維の混合された料紙に入っているものである。とすれば、この藍入は漉返の故に入れられたものと考えなければならない。「紙片」とは、反故紙が完全に叩解されずに、小紙片の形を留めて料紙に漉きこまれてしまったもので、宿紙などではよく見かけるものである。これも漉返紙の故に入ったと考えてよい。墨を脱色した漉返紙においては、漉返であると分からないように配慮するから、あまり見かけないが、これらの牛玉宝印では 2 枚ほど確認された。

これらの「折曲」から「紙片」までの何らかの項目にあてはまるものを集計したものが表 4 の「瑕疵」項目で、その合計が 54 枚である。最後に、これらの瑕疵が 1 つもないものは表 4 の「疵無」項目で、その合計は 11 枚である。「瑕疵」54 枚のうち「藍」のみと記載される表 2 の 64 明応 8 年 (1499) の妙観院公遍等連署起請文の料紙に転用された東寺御影堂牛玉宝印は、繊維の瑕疵とは認めがたいから、これを除くと、東寺百合文書に現存する牛玉宝印の料紙で、その成分繊維においてなんらかの瑕疵があるものは、53 枚となる。これは総数 65 枚の 81.5% にあたり、全て漉返紙と考えてよいであろう。したがって、黒川直則が東寺発行の牛玉宝印の料紙として史料に見えるものとして指摘した「雑紙」とは、この漉返紙に当たると考えられる。これは、東寺発行の牛玉宝印の料紙に限らず、熊野山宝印等の他寺社配布の牛玉宝印のそれについても当て嵌まることであろう。

東寺百合文書に現存する牛玉宝印 65 枚のうち 8 割強の 53 枚は、「雑紙」と呼ばれる漉返紙と判断したが、それでは残りの 12 枚の料紙はどのような紙種になるであろうか。これら 12 枚の牛玉

宝印は、表 4 でいえば「疵無」項目のグループに相当するが、表 2 でいえば、6 貞和 2 年 (1346) の熊野山宝印 (沙弥蓮性等の起請文料紙、以下括弧内に料紙に転用された起請文発給者の名を記す)、9 文和 4 年 (1355) の日吉七社宝印 (宝莊嚴院寺辺沙汰人百姓等)、11 延文 2 年 (1357) の八幡新宮宝印 (太良庄公文禪勝)、14 康安元年 (1361) の珍楽寺宝印 (太良庄公文禪勝)、19 貞治 2 年 (1363) (大山庄定使道正)、40 永享 9 年 (1437) (上久世庄利倉弥九郎等)、53 長祿 4 年 (1461) (東寺若衆) の御影堂宝印、54 長祿 4 年 (東寺若衆)・55 寛正 3 年 (1463) (上久世庄百姓等) の教王護国寺宝印、56 寛正 3 年 (上久世庄百姓等)・62 文明 4 年 (1472) (妙観院公遍等)・64 明応 8 年 (1499) (妙観院公遍等) 等の御影堂宝印である。牛玉宝印の種類で整理すると、御影堂宝印 6 枚、教王護国寺宝印 2 枚、熊野山宝印・日吉七社・珍楽寺・八幡新宮各 1 枚である。東寺寺内発行と他寺社発給との比率は 2 (8 枚) : 1 (4 枚) であるので、このグループは東寺寺内発行のものが多く、東寺寺内発行の牛玉宝印は 28 枚であるから、そのうちの 8 枚は 29%、他寺発給のそれは 37 枚であるから、そのうちの 4 枚は 11% に当たる。東寺寺内発給の牛玉宝印は、「疵無」の料紙を使っている比率が他寺発行のものより多いといえることができる。

これらの牛玉紙の料紙のグループを今仮に「H 瑕疵無牛玉紙」と呼ぶことにする。これに対して、前述の「雑紙」すなわち漉返紙と判断した 53 枚の牛玉紙のグループは、表 4 では「瑕疵」のグループに相当するが、これも仮に「G 瑕疵有牛玉紙」と呼ぶことにする。そして、「G 瑕疵有牛玉紙」と「H 瑕疵無牛玉紙」の縦寸法・横寸法・縦横比・厚さ・重さ・密度・単位当たり簀目本数・糸目幅のデータについてそれぞれ平均値・最大値・最大値を集計してみた。その結果はさきに検

討した表 3 の末尾に挙げておいた。

まず、縦寸法から密度までの質量の平均値を比べてみると、「G 瑕疵有牛玉紙」は、縦 291mm、横 426mm、縦横比率 1.46、厚さ 0.13mm、重さ 5.6g、密度 0.36 であるのに対し、「H 瑕疵無牛玉紙」は縦 290mm、横 463mm、縦横比率 1.60、厚さ 0.13mm、重さ 5.8g、密度 0.31 である。ほぼ似通った数値ではあるが、違いは横寸法で「G 瑕疵有牛玉紙」は「H 瑕疵無牛玉紙」より 3.7cm 短く、したがって縦横比率が 0.14 小さ目である。縦横の寸法も「G 瑕疵有牛玉紙」のものが最大値と最小値の差が大きく、大きさが区々であるのに対して、「H 瑕疵無牛玉紙」はその差が小さくほぼ均等なものが多い、すなわち品質が揃っているといえることができる。また「H 瑕疵無牛玉紙」の数値は、さきにみた D 百合奉行紙質のグループの数値、縦 286mm、横 472mm、縦横比率 1.65 と比べてもほぼ同じ数値となっている。すなわち、「雑紙」ではないと考えられる 12 枚の牛玉宝印は、縦横寸法と縦横比率で見ると室町幕府奉行人奉書のそれに近い数値を示すのである。ただし、厚さ以下のデータについては、E 百合奉行紙質調査の数値、厚さ 0.15mm、重さ 4.6g、密度 0.23 と比較した場合大きく異なっているのであるが、これは後にみるように打紙の関係を考慮しないと単純に比較はできないので、その数値だけ示すにとどめる。

つぎに、「G 瑕疵有牛玉紙」と「H 瑕疵無牛玉紙」の 1 寸当たり簀目本数・糸目幅についてそれぞれ平均値・最大値・最大値を比較してみると、前者は簀目平均 16 本 (最大 22 本、最小 12 本)、糸目幅平均 30mm (最大 41mm、最小 20mm) であるのに対し、後者は簀目平均 17 本 (最大 20 本、最小 14 本)、糸目幅平均 24mm (最大 34mm、最小 22mm) である。簀目 15~18 本ぐらいを境に、多いものが竹簀、少ないものが萱簀で漉かれ

たとえられるが、「H 瑕疵無牛玉紙」のものはほぼ細い竹簀で漉かれたと考えられ、糸目幅も狭いしっかりしたものを用いている。それに対して、「G 瑕疵有牛玉紙」のものは、萱簀で漉いたものや竹簀で漉いたものなどバラバラであり、糸目幅の広い粗悪な簀を用いているものも見受けられるのである。つまり、「H 瑕疵無牛玉紙」の方が、「G 瑕疵有牛玉紙」より良質の簀を使って漉き上げられていることがわかる。

最後に、表 2 の「瑕疵」が「無」(「藍」単独のものを含む)のもの(つまり H 瑕疵無牛玉紙)について、「米粉」の項目を検討してみると、「多」すなわち大量に入っているものが 6 枚、「有」つまりある程度入っているもの 4 枚、「少」すなわち少し入っているもの 2 枚であり、いずれも米粉入りの紙であることがわかる。参考のために「瑕疵」が「無」以外のもの(つまり G 瑕疵有牛玉紙)について、「米粉」の項目を検討してみると、「多」が 10 枚、「有」が 8 枚、「少」が 15 枚、「無」すなわち米粉の入っていないものが 20 枚である。この類はさきに「雑紙」=漉返紙と判断したのであるが、これには米粉を入れているものも入っていないものもあるということである。これに対し H 瑕疵無牛玉紙のグループは、少なからず米粉が填料として加えられている料紙であることができる。

さきに検討したように、東寺百合文書現存の牛玉宝印の料紙のうち 53 枚は漉返紙であったが、残りの 12 枚については、原料に繊維に「折曲」「損傷」「混在」「墨付」「藍入」「紙片」などの「瑕疵」が見られないものであり、室町幕府奉行人奉書の料紙に近い縦横寸法・比率をもち、填料として少なからず米粉が加えられていた。また、竹簀で丁寧に漉かれたとも考えられる。このような点を総合して判定すると、これらは杉原紙の特徴と合致したものといわなくてはならないので

ある¹⁶⁾。つまり、東寺百合文書現存の牛玉宝印の料紙は、その原本を調査することによって、黒川が指摘する檀紙は見出すことができなかったが、「雑紙」すなわち漉返紙と「杉原紙」との 2 つの紙種は確認できるのである。

なお、近世の牛玉宝印料紙の紙質については、ここで十分な検討をする準備がないが、急いで何点か調査をおこなった島津家文書に現存する琉球国王・摂政・三司官の起請文の罰文に用いられている熊野山及び那智瀧宝印のデータを、表 5 琉球国起請文料紙紙質調査結果に掲げておこう。表 5 の 4 宝永 6 年(1709)の那智瀧宝印(国王尚益起請文罰文料紙)は、図 1 に繊維の顕微鏡写真を示した¹⁷⁾。繊維は細い雁皮の繊維が主体であるが、太めの楮の繊維も入っており、折り曲がった繊維も見受けられる。繊維間の隙間が詰まっており紙打ちされていると思われる。填料として米粉が多く含まれており、これらの特徴から漉返紙と判定した。表 5 の 16 享保 5 年(1720)の那智瀧宝印(三司官西平朝叙起請文罰文料紙)も図 2 に顕微鏡写真を掲げた。繊維は太い楮主体であるがこれにも折曲がりが見られ、軽く紙打ちされて繊維の隙間が詰まっている。填料は白土であり、これも同じく漉返紙と判定した。表 5 琉球国起請文料紙紙質調査結果の 1 は寛文 10 年(1670)の那智瀧宝印であるが、雁皮繊維に白土を加えたもので、間似合紙と判定した。

全体として、24 枚の牛玉宝印(熊野山 4 枚、那智瀧 20 枚)のうち、漉返紙 23 枚、間似合紙 1 枚である。このように、近世の牛玉宝印も、中世のそれと同様に漉返紙すなわち雑紙を料紙にしているものが多いようである。近世の牛玉紙について、まだ充分調査したわけではないから、断定は避けたいと思うが、見通しとしては牛玉宝印の料紙は中世・近世を通じて、雑紙・間似合・杉原紙といった、どちらかという品質の劣る

紙をもって料紙としていると判断できる。

4 牛玉宝印料紙の特殊性

前節の結論は、牛玉宝印の料紙は、漉返紙・間似合・杉原紙といった紙を料紙としているということである。これらの料紙のうち、漉返紙は「雑紙」と呼ばれるように粗末な紙であり、間似合も雁皮に白土を入れた紙、杉原紙は非繊維物質を含んだ繊維に米粉を加えているように、けして上質の紙とはいえない料紙ばかりである。それならば何故に護符であり、神仏がかかわる文書ともいうべき牛玉宝印に、このような品質の落ちる料紙を使用したのであろうか。東寺百合文書に現存する牛玉宝印の料紙をよく観察すると、単に品質の劣る紙を使用しているばかりではなく、もう少し別の特徴もあるようである。

表 6 は表 2 の「米粉」「白土」「打紙」「染色」の項目について、牛玉宝印種別にデータを集計し直したものである。表 2 の「米粉」のデータ内容「多」「有」「少」「無」について、表 6 ではそれぞれ「米多」「米有」「米少」「米無」という項目を立てて集計している。すなわち、填料としての米粉が多く入っているものが「米多」、ある程度入っているものが「米有」、少し入っているものが「米少」、以上 3 項目の合計で少しでも米粉の入っているものが「米計」、米粉の入っていないものが「米無」という項目になっている。表 2 の「白土」の項目についても、表 6 では米粉と同じように填料として加えられている程度や有無の別によって「土多」「土有」「土少」「土計」「土無」とした。表 2 の「打紙」の項目については、表 6 の項目としては、ある程度強く打たれているものが「打有」、軽く打たれているものが「打軽」、打たれていないものが「打無」として集計した。表 2 の「染色」の項目については、表 6 では黄蘗染のものは「黄蘗」、丁子染のものは「丁

子」、微かに染めがあると思われるものが「染有」、以上 3 項目の合計で少しでも染色のあるものが「染計」、染色がないものを「染無」として項目を立て集計した。

まず、表 6 の集計について打紙から見ていくと、ある程度打ってある「打有」が 4 枚、軽く打ってある「打軽」が 49 枚、打紙をしていない「打無」が 12 枚となっている。打紙されているものとされていないものの比率は、打紙されているもの合計 53 枚が 81.5%であるに対し、されていないもの 12 枚は 18.5%である。これは筆者の主観的な判断を示したものであるが、客観的な数字としては表 2 の「密度」の数字が参考になる。重さを特定できず、密度が計算できなかったものが 4 枚ほどあり、繊維が楮のものと雁皮のものとは簡単に比較できないが、その数値が大きいほど打紙の程度が強いといえる。その数値を集計すると、0.23～0.27 が 11 枚、0.29～0.30 が 7 枚、0.31～0.40 が 30 枚、0.41～0.50 が 11 枚、0.51～0.60 が 2 枚という結果を得る。このうち 0.23～0.27 の 11 枚が「打無」に、0.29 以上の合計 50 枚が「打有」と「打軽」との合計にほぼ相当している。表 3 の E 百合奉行紙質調査の文書群類すなわち室町幕府奉行人奉書群類はその密度の平均が 0.23（最大値 0.26、最小値 0.20）であるが、これら料紙の紙種は杉原紙であって、しかも打紙はされていないものであった。これに対し、東寺百合文書現存牛玉宝印の大半は、その密度が 0.29 以上と室町幕府奉行人奉書よりかなり高い数値を示しており、打紙を施しているものと考えざるをえない。以上の検討結果でいえば、中世の牛玉紙の多くは、少なからず打紙が施されている可能性が推測されるのである。

表 6 に戻ると、1～4 の東寺寺内発行の牛玉宝印 28 紙のうちでは、少なからず打紙されているもの 17 枚、打紙していないものが 11 枚である。

これに対し、5～15 の他寺社が発行する牛玉宝印 37 枚のうちでは、打紙有りが 36 枚、打紙無しが 1 枚である。すなわち、打紙無しの牛玉宝印の料紙は東寺寺内発行のものが多く、東寺以外の寺社が発行したものは、殆どのものが打紙を施しているのである。

つぎに、表 6 の集計のうち「染色」に関するデータをみると、東寺百合文書現存牛玉宝印 65 枚のうち、黄蘗で染めたとされる「黄蘗」が 11 枚、丁子で染めたとされる「丁子」が 4 枚、何らかの染色が認められる「染有」が 8 枚であり、このように何らかの染色が施されているものの合計「染計」が 23 枚である。染色が認められない「染無」が残り 42 枚である。何らかの形で染色が施されているもの 23 枚は、全体の 35.4%にあたる。このうち 1～4 の東寺寺内発行の牛玉紙では、「染計」が 7 枚 (25%)、「染無」が 21 枚であり、他寺社発行のものでは、「染計」が 16 枚 (43.2%)、「染無」が 21 枚である。東寺寺内発行のものより、他寺社発行の牛玉宝印の方が染色されている比率が高いことが確認できる。

さらに、表 6 の集計のうち「米粉」に関するデータをみると、米粉が多く入っている「米多」が 16 枚、ある程度入っている「米有」が 12 枚、少し入っている「米少」が 17 枚である。米粉の少しでも入っているものの合計「米計」が 45 枚、全く入っていない「米無」が 20 枚である。計算すると、米粉が入っているものは全体の 69.2%にあたる。このうち 1～4 の東寺寺内発行の牛玉紙では、「米計」が 27 枚 (96.4%)、「米無」が 1 枚であり、他寺社発行のものでは、「米計」が 18 枚 (48.6%)、「米無」が 19 枚である。東寺寺内発行のものは全体として米粉を入れており、他寺社発行の牛玉宝印は約半分ほどに米粉が入っていることが確認できる。

同じく、表 6 の集計のうち「白土」に関するデ

ータをみると、白土が多く入っている「土多」が 1 枚、ある程度入っている「土有」が 20 枚、少し入っている「土少」が 7 枚である。白土の少しでも入っているものの合計「土計」が 28 枚、全く入っていない「土無」が 37 枚である。計算すると、白土が入っているものは全体の 43.1%にあたる。このうち 1～4 の東寺寺内発行の牛玉宝印では、「土計」が 6 枚 (21.4%)、「土無」が 22 枚であり、他寺社発行のものでは、「土計」が 22 枚 (59.5%)、「土無」が 15 枚である。東寺寺内発行のものは白土を入れているものが少ないが、他寺社発行の牛玉宝印は約半分以上のものに白土が入っていることが確認できる。

以上の考察をまとめると、東寺百合文書の中世の牛玉宝印の料紙 65 枚は、そのうち 81.5%にあたる 53 枚が紙打されており、また 35.4%に相当する 23 枚が何らかの染色が施されている。さらに少しでも米粉が入っているものは全体の 69.2%、少しでも白土が入っているものが 28 枚で全体の 43.1%にあたる。中世においては、天皇文書以外の公文書や私文書は、通常打紙した料紙や染色した料紙は使用しない。また、杉原紙や檀紙さらには漉返紙には、米粉を入れることがあるが、近世の間似合紙が登場するまでには白土を填料に使う例は少ない。この点、牛玉宝印の料紙は、このような打紙、染色、白土入れといった特殊な性格をもった料紙であるということができるのである。

おわりに

以上、東寺百合文書に現存する起請文の料紙に転用された牛玉宝印の原本について、その質量の計測や繊維の顕微鏡観察を行うことにより、これらの料紙に使われている紙種は漉返紙または杉原紙であること、しかも中世の普通の文書ではあまり用いない打紙や染色を施された紙や

白土を填料として入れている料紙も少なくないことを指摘した。打紙や染色は一種の装飾であるが、これは牛玉宝印が護符であり、神仏の発給するかたちの文書と考えられていたからであろう。その上、何故に白土のような填料を加えるのかということも大きな問題であるが、残念ながらここでは十分な説得力のある結論に述べることはできない。そのような結論は今後を期すしかないが、少し見通しを述べることによって、結論に装飾を加えておきたいと思う。

起請文の研究者として著名である千々和到は、平成 14 年（2002）に採択された國學院大學の文部科学省二十一世紀 COE プログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の事業推進担当者として「護符・起請文研究プロジェクト」を立ち上げた。そして、引き続き科学研究費基盤研究 B「日本における護符文化の解明」の研究をおこなってきたが、その後その研究成果を『日本の護符文化』¹⁸⁾という単行本に編集刊行している。その編著の最後に千々和とこれらの研究プロジェクトに参加したメンバーによる座談会「日本の護符文化」が掲載されている。その対談のなかで「お札を受ける意味は、神々を勧請すること」という話題が載せられ、神社本庁総合研究所研究員嶋津宣史の発言として次のような内容が記されている。

お札を調製する社寺側の意識では、諸神諸仏を勧請して、その威霊をお札に込めていく。あるいは神様の「みしるし」であるという考えのもとでお札を作成していく。一方それを受ける側にとっては、まさに神様を身近にお招きした、勧請したという意識で祀っていく、ということだったのです。

牛玉宝印もその一種であるお札とは、神仏の「威霊」が籠められているものだという。東寺の御影堂宝印の場合は、正月 3 日の御影堂修正に

において、牛玉導師や諸衆が慈救呪を誦しながら牛玉加持を行って宝印を押し、祖師弘法大師の「威霊」を籠めている。その神仏の「威霊」が籠められた験が神仏の種字を印文にした宝印の押印ということになる。その宝印の朱肉には、牛玉＝牛黄が加えられており、これが万能の解毒薬として珍重されていたことから、除魔・除災の効果を信じる基にもなっているという¹⁹⁾。

たしかに牛玉紙に宝印を押すことが、これに神仏の「威霊」を籠めた験である。このこと自体は間違いはないであろう。しかし、神仏の「威霊」を籠めた験は宝印のみだったのであろうか。右に触れた千々和編の『日本の護符文化』には、全国の神社に対して護符についての詳細なアンケート調査を行った倉石忠彦・倉石美都の調査報告²⁰⁾が載せられている。そのなかで、牛玉紙に宝印を押すこと以外に、牛玉宝印の料紙に加えて籠める神仏の「威霊」の験が存在するというとも報告されている。

上野国一社八幡宮（群馬県高崎市）の「牛玉の符」には靫を、厳島神社（広島県宮島町）の「砂守」には厳島神社境内の砂を、玉造湯神社（島根県松江市）の「御神符」には榊の葉をそれぞれ入れるなど、なかには植物などを入れる護符もある。

靫・砂・榊はそれぞれの神社の所縁のものであり、神仏の「威霊」が籠る験に相応しいものと思われるが、文意として牛玉紙の料紙に漉きこまれているものか、護符の包紙に同封してあるのか明確ではない。しかし、厳島神社では境内の砂を護符の中に入れるということであるが、その砂が祭神の「威霊」の験とされていることは間違いない。

同じく千々和到編の『日本の護符文化』には、千々和自身が全国の牛玉宝印とその版木を調査した結果の報告²¹⁾があるが、そのなかで和歌山

県かつらぎ町丹生都比売神社牛玉宝印の版木を紹介している。この板木には「天野宮生土宝印」と刻まれているが、「生土」とは「王」の一番上の「一」の一画を取って「牛」の下に付けたものであり、「うぶすな」とも読めるものである。江戸時代の国学者たちを中心に語られた牛玉宝印の語原説に基づいて作られたものであろうとしている。これなども、祭神の「生土」がその「威霊」の験とする意識が働いている例とも考えられる。

東大寺二月堂の牛玉宝印は、那智瀧宝印とともに現存する実物の最も古いものである²⁾が、現在でも修二会(お水取り)において配布されている。かつて東大寺図書館で經典調査に参加させていただいた折、筆者は職員の方からこの料紙を作る際に土を入れていたという話をお聞きしたことがあるが、その詳細な点については定かな記憶がない。現在では二月堂牛玉宝印の料紙は名塩和紙の人間国宝谷野剛惟氏の手によって調製され、東大寺に納められている。筆者は去秋調製現場を実際に見学もさせていただいたが、雁皮繊維混じりの反故紙に名塩産の青土を加えて漉かれていた。おそらく東大寺における古式の作成方法か、名塩の伝統的な間似合紙の製法にならって作られているものと拝察した。ここで詳細に述べる紙数の余裕はないが、要は反故

紙に土を入れて漉いていることである。漉返紙の原料である反故紙は、本来東大寺二月堂内で使われた文書典籍類の反故であったであろうし、その土も二月堂本尊と何らかの所縁の土であったはずであり、それは二月堂十一面観音の「威霊」の験であったであろう。中世の牛玉宝印、また近世の牛玉宝印においても、東寺百合文書現存の牛玉宝印と同じようにその多くが漉返紙を料紙とし、白土を填料として加えるものであるとしたら、それはこのような神仏の「威霊」を籠めるためであったと考えられないであろうか。

名塩は雁皮に色土を加えて作る間似合紙で有名な和紙の産地であるが、江戸時代から西日本一帯の諸藩の藩札の料紙も供給していた³⁾。東京大学経済学部資料室には、豊富な日本の貨幣資料が所蔵されている⁴⁾が、その中に藩札資料があり、名塩紙で漉かれたものと思われるものも含まれている。藩札という紙幣に土が含まれているという事実は、牛玉宝印の料紙と同様に、筆者には藩札と神仏との関わりを想起させるものがある。

(とみた まさひろ：富山大学名誉教授)

1) 拙稿「東寺百合文書に伝存する起請文の料紙(牛玉紙)」(湯山賢一編『古文書料紙論集』(仮題)掲載予定)

2) 拙稿「神仏の紙と人の紙」(『古文書研究』79号掲載予定)

3) 東寺百合文書ル函39号貞和2年9月日付沙弥蓮性等連署起請文の端裏に「亥歳建武二年正月一日」という熊野山宝印給付の日付と思しき銘が見られる。

4) 熊野本宮と熊野新宮の牛玉宝印は、ともに「熊野山宝印」という文字が書かれる。中世においてはその区別が難しいので、これを熊野山宝印として一括した。

5) 相田二郎「起請文の料紙牛玉宝印について」(『日本古文書学の諸問題』(相田二郎著作集1)名著出版、1976)によれば、起請文の料紙とされた牛玉宝印の最も古いものは文永3年(1266)の那智瀧宝印と東大寺二月堂牛玉宝印であるから、那智瀧宝印は東寺百合文書には古いものが伝わっていないだけで、熊野山宝印より新しいわけではない。

6) 註4相田二郎論文によれば、熊野三山の牛玉宝印が烏点を用いるのは、那智瀧宝印が文安2年(1445)から明応3年(1494)までの間、熊野新宮宝印では慶長5年(1600)以降、熊野本宮宝印では元和4年(1618)以降としている。

- 7) 「東寺の起請文と牛玉宝印」(『京都府立総合資料館紀要』8号, p. 99~149, 1980)。黒川が指摘する牛玉紙に書かれた88通の起請文のうち、28通は既に東寺から流出してしまったもので、東寺百合文書中に現存するのは起請文60通の65枚の牛玉紙である。
- 8) 東寺文書データベースから東寺百合文書のうち縦紙の室町幕府奉行人奉書の正文を選び出し、縦寸法と横寸法とを得た。縦横比率は計算で求めた。したがって、重量以下のデータはない。
- 9) 琉球国起請文は、全て霊社上巻起請文で継紙になっているため、1紙毎の重量を計測することができないので、残念ながら「重」および「密」のデータはない。
- 10) 牛玉紙の裏を翻して起請文を書く際には、損傷した部分や端裏などを切除して使用した可能性があることについては、註1拙稿を参照されたい。
- 11) 杉原紙については、中世文書料紙の第一人者を自認する上島有の料紙体系論には存在しない。上島は、「中世文書の料紙の種類」(小川信編『中世古文書の世界』吉川弘文館, 1991)において、「私も先学から杉原紙は檀紙や引合に比べて粗悪な紙であると教えられてきた。これは現在の古文書の料紙に関心を有する人達の共通の認識といってよいと思うが、しからば中世の具体的な文書について、これが杉原紙だと自信をもっていえる人はいないのではなかろうか」と述べ、杉原紙という紙種名を使用しないことにしたい。しかし、時代的に変化する杉原紙の鎌倉時代における姿は、上島のいう「奉書Ⅲ」のイメージに近い。
- 12) 杉原紙に対するこのようなイメージについては、湯山賢一を中心とする研究グループの調査や討論を経て形成されたものであり、今後の文書料紙研究に対する新しい問題提起をしたものと考えている。林譲「古文書料紙の使用法覚書(一) 一御判御教書と御内書一」、富田正弘「紙素材文化財の料紙判定法について」(以上、『紙素材文化財(文書・典籍・聖教・絵図)の年代推定に関する基礎的研究』平成15~17年度科研報告書(代表富田正弘)2008)、湯山賢一「和紙の変遷とその歴史」(『紙素材文化財(文書・典籍・聖教・絵図)の年代推定に関する基礎的研究』平成18・19年度科研報告書(代表富田正弘)2010)、富田正弘「日本の文書料紙概観」(国立歴史民俗博物館展覧会図録『文書のかたちとはたらき』2014)参照。
- 13) 檀紙については、湯山賢一「室町時代前期の「檀紙」(強杉原)を中心に」(『古文書料紙原本にみる材質の地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究』平成4~6年度科研報告書(代表富田正弘)1995)、その他註12論文参照。上島有「中世文書の料紙の種類」(註11)における中世文書料紙分類論では「檀紙」の分類があるが、これは厳密には南北朝期~戦国期の「強杉原」にあたる。鎌倉期の檀紙については、上島分類論では「奉書Ⅱ」に当たるものと判断される。
- 14) 註2拙稿を参照されたい。
- 15) 上島「中世文書の料紙の種類」(小川信編『中世古文書の世界』)
- 16) 拙稿「中世文書の料紙形態の歴史的変遷を考える」(『歴博』184, p.15~19, 2014)等を参照されたい。
- 17) 島津家文書は東京大学史料編纂所蔵。図1・2の写真は、同所修復室の高島晶彦氏が撮影したものである。
- 18) 千々和到編『日本の護符文化』弘文堂, 2010
- 19) 佐藤道子「悔過会と牛玉宝印」(町田市立博物館『牛玉宝印一祈りと誓いの呪符一』1991)
- 20) 倉石忠彦・倉石美都「神社の護符―「神社のお札アンケート」のまとめ―」(『日本の護符文化』)
- 21) 千々和到「護符の調査一起請文と牛玉宝印を中心として」(『日本の護符文化』)
- 22) 千々和到「東大寺文書に見える牛玉宝印」(『南都佛教』第39号, p.97~116, 1977)
- 23) 玄野彊「藩札資料からみた名塩紙」(横田健一先生還暦記念会編『日本史論叢』1976)
- 24) 資料室の藩札の調査については、講師小島浩之氏にいろいろ御世話になった。ここに厚くお礼を申し上げます。

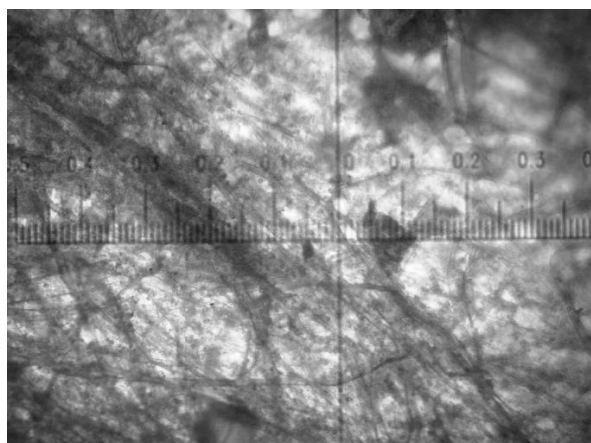


図 1 琉球王尚益起請文顕微鏡写真

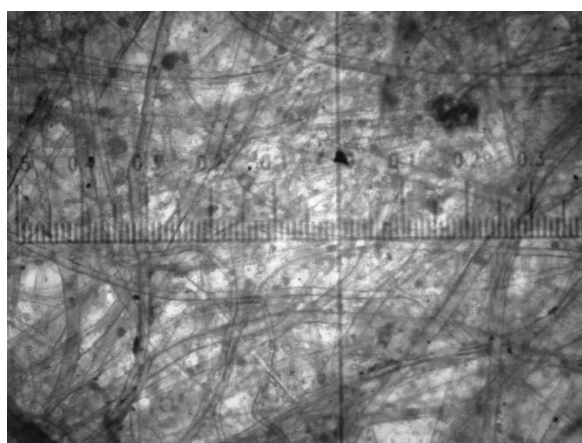


図 2 琉球三司官西平朝叙起請文顕微鏡写真

表 1 東寺百合文書現存牛玉宝印種別時代別集計

	牛玉種	鎌倉	南北	室町	戦国	枚数計
1	御影堂	0	9	12	2	23
2	教王護国寺	0	0	2	0	2
3	千手堂	0	0	1	0	1
4	夜叉神	0	0	2	0	2
5	熊野山	2	10	9	0	21
6	那智瀧	0	0	2	0	2
7	金峰山	0	2	2	0	4
8	鞍馬寺	0	3	0	0	3
9	根本中堂	0	0	1	0	1
10	日吉七社	0	1	0	0	1
11	善通寺	0	1	0	0	1
12	彦山	0	1	0	0	1
13	珍楽寺	0	1	0	0	1
14	八幡新宮	0	1	0	0	1
15	福田寺	0	0	1	0	1

表 2 東寺百合文書現存牛玉宝印紙質調查結果

	起請文日付	西曆	刷書別	牛玉寺社	起請文名	紙通	縦	横	比率	厚	重	密度	量數	目量	糸数	糸目	板目	綴維	打紙	切断	米粉	白土	瑕疵	染色	番号	
1	正安 4 年 4 月 25 日	1302	木版刷	熊野山	大良庄百姓僧伽巴等連署起請文	漣返	284	428	1.46	0.13	7.5	0.46	14	透視	28	微か	裏微	緒	綵	切斷	多	少	折	黄蘗染	お7	
2	建武 2 年 4 月 24 日	1313	木版刷	熊野山	戸割島庄公文寛成起請文	漣返	299	448	1.5	0.15			14	僅か	30	微か	裏微	緒	綵	切斷	有	有	折	丁子染	お77	
3	建武 元年 12 月 26 日	1334	木版刷	熊野山	大良庄合定平内成事起請文	漣返	289	417	1.44	0.11	4.7	0.35	20	僅か表	34	微か	裏微	緒	綵	有	多	有	湿	黄蘗染	エ49	
4	建武 2 年 正月 日	1335	木版刷	熊野山	新見庄東方地頭方預所學節等連署起請文	漣返	312	407	1.3	0.17			12	微か	40	透視	裏微	緒	綵	有	無	無	折藍	お25-2		
5	康永 元年 11 月 21 日	1346	木版刷	熊野山	法橋祐美起請文	漣返	299	418	1.4	0.2	7.7	0.31	16	微か裏	34	微か	裏微	緒	綵	切斷	多	有	無	無	せ12	
6	貞和 2 年 9 月 日	1346	木版刷	熊野山	沙弥蓮性等連署起請文	杉原	302	436	1.44	0.18	9.6	0.41	15	微か裏	34	微か	裏微	緒	綵	有	多	有	無	無	じ39	
7	貞和 4 年 4 月 8 日	1348	手書	鞍馬寺	某起請文	漣返	266	340	1.28	0.12	3.8	0.35	18	微か表	27	微か	裏微	緒	綵	有	無	無	折傷湿	お24		
8	貞和 4 年 12 月 20 日	1348	手書	普通寺	矢野庄田所旨範等連署起請文	漣返	248	320	1.29	0.1	2.8	0.35	16	僅か	27	微か	不註	緒	綵	有	無	有	臺	お20		
9	文和 4 年 10 月 19 日	1355	手書	日吉七社	宝莊殿院寺辺沙汰人百姓等連署起請文	杉原	320	505	1.58	0.15	7.8	0.32	14	透視	23	微か	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お45	
10	文和 4 年 12 月 9 日	1355	手書	鞍馬寺	大良庄沙弥西向起請文	漣返	295	428	1.45	0.19	9.4	0.39	16	微か裏	32	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折傷	有	お761	
11	延文 2 年 11 月 15 日	1357	木版刷	八幡新宮	大良庄公文津勝起請文	杉原	284	416	1.46	0.13	5.6	0.36	14	微か裏	22	微か	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お45	
12	延文 4 年 2 月 15 日	1359	手書	鞍馬寺	大良庄公文主大夫起請文	漣返	318	448	1.44	0.15	6.6	0.3		不註	20	透視	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お46	
13	延文 5 年 3 月 5 日	1360	手書	御影堂	大良庄公文津勝合定案奏連署起請文	漣返	294	508	1.73	0.14	7	0.33	16	僅か裏	26	微か	裏微	緒	綵	切斷	少	無	無	無	お35	
14	康安 元年 7 月 13 日	1361	手書	珍樂寺	大良庄公文津勝起請文	杉原	282	371	1.42	0.09	2.6	0.3	15	僅か	26	微か	裏微	緒	綵	有	多	有	無	無	お17	
15	康安 2 年 9 月 26 日	1362	手書	大山庄行岡	西谷大夫連署起請文	漣返	319	503	1.58	0.13	6.2	0.3	15	透視裏	23	透視	裏微	緒	綵	切斷	有	無	無	無	お44	
16	貞治 元年 11 月 2 日	1362	手書	御影堂	大山庄上使弥五郎起請文	漣返	312	513	1.64	0.14	7.3	0.33	15	透視裏	36	微か	裏微	緒	綵	有	有	無	折湿	無	お45	
17	貞治 2 年 8 月 4 日	1363	手書	御影堂	大山庄宗真等連署起請文	漣返	324	493	1.52	0.15	7.8	0.33	16	僅か裏	23	微か	裏微	緒	綵	切斷	多	無	無	無	お46	
18	貞治 2 年 8 月 6 日	1363	手書	御影堂	円通等連署起請文	漣返	320	502	1.57	0.14	8.8	0.39	18	微か裏	25	微か	裏微	緒	綵	切斷	少	無	無	無	お40	
19	貞治 2 年 12 月 23 日	1363	手書	御影堂	大山庄定使連署起請文	杉原	310	503	1.62	0.15	10.2	0.44		不註	28	微か	裏微	緒	綵	有	多	無	無	無	お49	
20	貞治 4 年 12 月 25 日	1365	手書	御影堂	大山庄惣心等連署起請文	漣返	319	514	1.61	0.15	7.9	0.32	16	透視裏	20	透視	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お47	
21	貞治 5 年 10 月 3 日	1366	手書	御影堂	大良庄上使兼巴起請文	漣返	323	459	1.42	0.07	5.2	0.5	18	微か裏	32	透視	裏微	緒	綵	切斷	少	有	折	黄蘗染	お50	
22	貞治 5 年 11 月 12 日	1366	木版刷	熊野山	大良庄公文津起請文	漣返	261	370	1.42	0.1	4.8	0.5	18	微か裏	27	微か	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お51	
23	貞治 5 年 11 月 15 日	1366	木版刷	熊野山	大良庄源俊起請文	漣返	303	422	1.39	0.12	5	0.33	20	微か表	26	透視	裏微	緒	綵	有	少	無	無	有	お52	
24	貞治 6 年 9 月 日	1367	木版刷	熊野山	矢野庄百姓等連署起請文	漣返	275	366	1.33	0.2	6.8	0.34	16	微か	39	微か	裏微	緒	綵	有	無	無	無	無	お48-1	
25	貞治 6 年 9 月 日	1367	手書	金峰山	矢野庄百姓等連署起請文	漣返	287	408	1.42	0.14	5.6	0.34	15	透視	31	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折	無	お48-2	
26	貞安 2 年 3 月 15 日	1369	手書	金峰山	矢野庄上使祐賢起請文	漣返	246	332	1.35	0.11	3.6	0.4	18	透視	25	微か	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お38	
27	永和 元年 4 月 26 日	1375	木版刷	熊野山	大良庄地頭頼家面方百姓妙連等連署起請文	漣返	292	407	1.39	0.11	5.4	0.41	15	透視裏	30	透視	裏微	緒	綵	有	多	有	傷	無	お80	
28	永和 4 年 5 月 22 日	1378	木版刷	御影堂	性美起請文	漣返	273	399	1.46	0.12	4.4	0.34	15	微か裏	30	透視	裏微	緒	綵	有	有	有	臺	有	お52	
29	永和 4 年 12 月 24 日	1378	木版刷	熊野山	大良庄公文津起請文	漣返	276	399	1.45	0.15	6.5	0.39	14	透視	37	微か	裏微	緒	綵	有	多	無	無	有	お81	
30	明德 元年 10 月 5 日	1390	木版刷	彦山	大山庄公文津起請文	漣返	255	357	1.4	0.11	4	0.4	15	微か	30	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折傷湿	有	お84	
31	明德 元年 10 月 5 日	1390	木版刷	熊野山	大山庄百姓等起請文	漣返	310	396	1.28	0.14	7.2	0.42	18	微か	31	微か	裏微	緒	綵	有	少	有	傷	無	お87	
32	応永 2 年 10 月 8 日	1395	手書	金峰山	矢野庄田所家久職事十郎次郎連署起請文	漣返	311	466	1.5	0.09	4.5	0.35		不註	40	微か	裏微	緒	綵	有	多	少	無	無	お90	
33	応永 21 年 12 月 日	1414	手書	金峰山	大良庄百姓等起請文	漣返	311	390	1.25	0.13			14	頭書表	21	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折	無	お87	
34	応永 22 年 11 月 21 日	1415	木版刷	熊野山	大良庄百姓等起請文	漣返	290	415	1.43	0.16	8.4	0.44	14	透視	38	微か	裏微	緒	綵	有	少	有	傷	無	お90	
35	応永 25 年 9 月 15 日	1418	手書	稻本中堂	番匠大工宗繼起請文	漣返	283	396	1.4	0.1	3.2	0.29	14	頭書表	35	透視	裏微	緒	綵	有	有	有	無	無	お71	
36	正長 2 年 6 月 11 日	1429	木版刷	御影堂	大良庄上使祐賢起請文	漣返	298	493	1.62	0.11	4.2	0.27	17	透視	21	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折	無	お159	
37	正長 2 年 8 月 10 日	1429	木版刷	御影堂	鎮守八幡宮々々儀原国次彦三郎起請文	漣返	300	492	1.64	0.11	4.4	0.27	21	透視裏	23	透視	裏微	緒	綵	有	有	無	無	無	お118	
38	正長 2 年 8 月 25 日	1429	木版刷	御影堂	鎮守八幡宮々々儀原国次彦三郎起請文	漣返	294	490	1.67	0.11	4.9	0.31	15	透視	25	微か	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お120	
39	永享 6 年 4 月 25 日	1434	木版刷	御影堂	下久世庄右衛門四郎起請文	漣返	295	470	1.59	0.08	3	0.27	22	透視裏	23	透視	裏微	緒	綵	有	多	無	無	無	お130	
40	永享 9 年 9 月 3 日	1437	木版刷	御影堂	上久世庄利衛門九郎等連署起請文	杉原	295	485	1.64	0.14	5.4	0.27	17	微か表	22	微か	裏微	緒	綵	有	多	無	無	無	お146	
41	永享 10 年 8 月 日	1438	手書	夜叉神	祐賢起請文	漣返	270	393	1.46	0.07	2.9	0.39	15	頭書表	32	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	無	無	お108	
42	嘉吉 元年 12 月 4 日	1441	木版刷	熊野山	若狹國太良良本所方百姓北坊等連署起請文	漣返	294	414	1.41	0.08	4.4	0.45	15	微か	30	微か	裏微	緒	綵	有	無	少	折	黄蘗染	お205	
43	文安 元年 11 月 4 日	1444	木版刷	熊野山	權律師曾端起請文	漣返	278	447	1.61	0.07	3.8	0.44	15	微か表	25	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折	黄蘗染	お77	
44	文安 元年 11 月 27 日	1444	木版刷	熊野山	西向起請文	漣返	280	444	1.59	0.17	8	0.38	15	微か	25	微か	裏微	緒	綵	有	少	無	無	有	お149	
45	文安 3 年 11 月 日	1446	木版刷	熊野山	大良庄百姓等起請文	漣返	290	392	1.35	0.09	5.2	0.51	14	微か		不註	有	緒	綵	有	無	有	折	無	お223	
46	文安 4 年 11 月 日	1447	木版刷	熊野山	大良庄平内大夫等連署起請文	漣返	289	389	1.35	0.11	5	0.4	15	微か裏	21	微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折	黄蘗染	お228	
47	宝徳 2 年 12 月 8 日	1450	木版刷	熊野山	大良庄太郎大夫起請文	漣返	299	410	1.37	0.17	7.6	0.36	14	頭書裏	40	微か	裏微	緒	綵	有	無	無	折	有	お84	
48	宝徳 3 年 12 月 12 日	1451	木版刷	熊野山	大良庄三郎介右馬大夫連署起請文	漣返	292	395	1.35	0.1	4.7	0.41	16	微か		微か	裏微	緒	綵	有	無	有	折	無	お246	
49	長祿 3 年 8 月 25 日	1459	木版刷	那智瀧	大良庄被官百姓等連署起請文	漣返	301	416	1.38	0.2	7.4	0.3	12	透視裏		不註	裏微	緒	綵	有	無	有	折	無	お161	
50	長祿 3 年 9 月 15 日	1459	木版刷	那智瀧	大良庄百姓等連署起請文	漣返	291	420	1.44	0.15	5.8	0.32	14	透視裏	41	微か	裏微	緒	綵	有	無	無	折傷	黄蘗染	お267	
51	長祿 3 年 9 月 日	1459	木版刷	熊野山	公文所法眼富野淨起請文	漣返	287	395	1.38	0.13	3.4	0.23	15	微か表	26	微か	裏微	緒	綵	有	無	無	折	無	お163	
52	長祿 3 年 9 月 日	1459	手書	福田寺	駿河縣依起請文	漣返	267	384	1.44	0.11	4.4	0.39	16	透視	26	微か	裏微	緒	綵	有	少	多	折	無	お164	
53	長祿 4 年 2 月 日	1460	木版刷	御影堂	若衆連署起請文	杉原	290	484	1.67	0.15	5.7	0.27	20	透視裏	22	透視	裏微	緒	綵	有	多	無	無	無	黄蘗染	お199-1
54	長祿 4 年 2 月 日	1460	手書	教王護國寺	若衆連署起請文	杉原	277	464	1.68	0.1	3.5	0.27	15	透視裏	23	透視	裏微	緒	綵	有	無	無	無	無	お199-2	
55	寛正 3 年 11 月 9 日	1462	手書	教王護國寺	上久世庄百姓等連署起請文	杉原	278	452	1.63	0.11	3.4	0.25	15	微か	24	微か	裏微	緒	綵	有	無	無	無	無	お184-1	
56	寛正 3 年 11 月 9 日	1462	木版刷	御影堂	上久世庄百姓等連署起請文	杉原	291	478	1.64	0.15	5.2	0.25		不註	29	透視	裏微	緒	綵	有	少	無	無	無	お184-2	
57	寛正 3 年 11 月 11 日	1462	手書	夜叉神	下久世庄百姓等連署起請文	漣返</																				

	起請文日付	西暦	刷書別	牛王寺社	起請文名	紙種	縦	横	比率	厚	重	密度	實数	實目	系数	糸目	板目	綴維	打紙	切断	米粉	白土	瑕疵	染色	番号
59 寛正	5 年 4 月 29 日	1464	木版刷	御影堂	浄任起請文	漣返	295	494	1.67	0.12	5	0.29	18	微妙	22	微妙	裏頭	摺	摺	無	多	無	摺	無	ナ132
60 応仁	2 年 6 月 晦 日	1468	木版刷	御影堂	権大僧都覺全起請文	漣返	287	477	1.66	0.1	4.2	0.31	20	微妙	31	微妙	裏頭	摺	摺	無	多	無	摺	無	ユ107
61 応仁	2 年 6 月 晦 日	1468	木版刷	御影堂	権大僧都覺全起請文	漣返	284	484	1.7	0.15	6.1	0.3	22	微妙	33	微妙	裏頭	摺	摺	無	多	無	摺	無	ユ108
62 文明	4 年 12 月 15 日	1472	木版刷	御影堂	妙禪院公暹等運署起請文	杉原	281	481	1.71	0.1	3.6	0.27	18	透視裏	23	僅か	裏頭	摺	無	切断	有	無	無	無	ユ114-1
63 文明	4 年 12 月 15 日	1472	木版刷	御影堂	妙禪院公暹等運署起請文	漣返	280	478	1.71	0.1	3.6	0.27	17	透視裏	24	透視	裏頭	摺	無	切断	有	無	摺	裏裏染	ユ114-2
64 明応	8 年 11 月 5 日	1499	木版刷	御影堂	妙禪院公暹等運署起請文	杉原	287	480	1.67	0.15	6.6	0.32	20	透視裏	22	僅か	裏頭	摺	摺	切断	多	無	摺	無	ナ202
65 天文	23 年 正月 晦 日	1554	木版刷	御影堂	宝殿院祐重起請文	漣返	338	428	1.27	0.17	8.3	0.34	13	透し裏	40	透し	裏頭	摺	摺	切断	少	有	折混	無	ナ211
				平均			291	433	1.49	0.13	5.6	0.35	16		29										
				最大値			338	514	1.73	0.2	10.2	0.58	22		41										
				最小値			246	320	1.25	0.07	2.6	0.25	12		20										

表 3 文書群別料紙質量データ比較

文書グループ	縦平均	縦最大	縦最小	横平均	横最大	横最小	比平均	比最大	比最小	厚平均	厚最大	厚最小	重平均	重最大	重最小	密度平均	密度最大	密度最小	実数平均	実数最大	実数最小	糸平均	糸最大	糸最小
1A百合文書起請文	291	338	246	433	514	320	1.49	1.73	1.25	0.13	0.2	0.07	5.6	10.2	2.6	0.35	0.58	0.25	16	22	12	29	41	20
2B御影堂宝印	300	338	273	483	514	399	1.61	1.73	1.27	0.13	0.17	0.07	5.9	10.2	3	0.32	0.5	0.25	13	22	13	26	40	20
3C熊野山宝印	291	312	261	411	448	366	1.41	1.61	1.28	0.14	0.2	0.07	6.1	9.6	3.4	0.39	0.51	0.23	15	20	12	33	41	25
4D百合奉行奉書	286	319	265	472	517	433	1.65	1.74	1.53															
5E百合奉行紙質調査	278	286	265	466	476	425	1.68	1.74	1.65	0.15	1.19	0.1	4.6	7.1	2.7	0.23	0.26	0.2	18	19	14	22	23	21
6F琉球国起請文	225	253	204	291	352	250	1.29	1.45	1.14	0.08	0.11	0.06							20	27	13	36	54	25
7G瑕疵有牛玉紙	291	338	246	426	514	320	1.46	1.73	1.25	0.13	0.2	0.07	5.6	9.4	2.8	0.36	0.58	0.23	16	22	12	30	41	20
8H瑕疵無牛玉紙	290	320	262	463	505	371	1.6	1.71	1.42	0.13	0.18	0.09	5.8	10.2	2.6	0.31	0.44	0.25	17	20	14	24	34	22

表 4 牛玉宝印種別紙質データ集計 I

牛玉種	枚数	漣返	杉原	椿	椿斐	椿桎	椿竹	米多	米有	米少	米計	米無	折曲	損傷	混在	墨付	藍入	紙片	瑕疵	疵無
1 御影堂	23	17	6	15	8	0	0	9	8	6	23	0	14	1	8	3	2	0	18	5
2 教王護国寺	2	0	2	2	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
3 千手堂	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0
4 夜叉神	2	2	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	2	0
5 熊野山	21	20	1	11	8	1	1	5	1	4	10	11	12	5	10	0	2	2	20	1
6 那智瀧	2	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	1	1	1	0	0	0	2	0
7 金峰山	4	4	0	2	2	0	0	1	0	1	2	2	2	2	2	0	0	0	4	0
8 鞍馬寺	3	3	0	1	1	1	0	0	0	1	1	2	3	2	2	0	0	0	3	0
9 根本中堂	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
10 日吉七社	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
11 善通寺	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0
12 彦山	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	0	1	0
13 珍栄寺	1	0	1	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
14 八幡新宮	1	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
15 堀田寺	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0
合計	65	53	12	38	23	3	1	16	12	17	45	20	35	12	27	4	4	2	54	11

表 5 琉球国起請文料紙紙質調査結果

	年月日	西曆	文書名	縦	横	比率	主体纖維	紙質	實數	糸幅	米粉	白土	打紙	折目	染紙	牛玉種	番号
1	寛文 10 年 5 月 15 日	1670	琉球国司尚貞起請文	212	298	1.41	斐紙主体	間以合	24		多	有	輕	横折		那智瀧	3280-2
2	慶長 16 年 9 月 20 日	1611	琉球国勝連朝方外五名連署起請文	217	291	1.34	雁皮主体	漣返紙	27			有	有	無		那智瀧	3875-6
3	慶長 20 年 6 月 吉 日	1615	琉球国堪政佐敷王子朝昌起請文	220	286	1.23	漣斐交	漣返紙	21		少	多	有	横折		那智瀧	3894-2
4	宝永 7 年 5 月 吉 日	1710	琉球国司尚益靈社起請文	209	263	1.25	雁皮主体	漣返紙		30	多	無	密	無	黄蘗染	那智瀧	6345-2
5	正徳 5 年 5 月 3 日	1715	中山王尚敬起請文	232	303	1.31	漣皮主体	漣返紙	22	43	無	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	6392-2
6	正徳 3 年 5 月 吉 日	1713	伊舎堂盛富起請文	204	265	1.3	雁皮主体	漣返紙	21	27	多	無	密	無		那智瀧	6538-3
7	元禄 13 年 4 月 26 日	1700	池城安倚起請文(粗悪)	212	293	1.38	雁皮主体	漣返紙	21	32	多	無	輕	横折切	黄蘗染	那智瀧	6756-2
8	元禄 14 年 4 月 20 日	1701	田場良衆起請文(粗悪)	235	291	1.24	漣主体	漣返紙	18	30	無	無	輕	無		那智瀧	6757-2
9	元禄 16 年 4 月 18 日	1703	識名盛命起請文	213	298	1.4	雁皮主体	漣返紙	18	30	多	無	輕	無	黄蘗染	那智瀧	6758-2
10	宝永 2 年 12 月 18 日	1705	越來朝奇起請文	207	294	1.42	雁皮主体	漣返紙	20	28	多	無	密	無		那智瀧	6759-2
11	宝永 8 年 4 月 25 日	1711	田島朝由起請文	231	282	1.22	漣主体	漣返紙	21	35	無	有	輕	無		那智瀧	6761-2
12	宝永 8 年 4 月 25 日	1711	浦添良意起請文	231	278	1.2	漣主体	漣返紙	18	33	無	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	6762-2
13	正徳 3 年 5 月 吉 日	1713	豐見城朝匡起請文	231	335	1.45	漣主体	漣返紙	14	45	無	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	6763-2
14	享保 9 年閏4 月 23 日	1724	摩文仁安政起請文(粗悪)	229	263	1.15		漣返紙			無	無	無	無	黄蘗染	那智瀧	6804-2
15	宝曆 5 年 5 月 9 日	1755	中山王尚穆起請文	217	260	1.2		漣返紙	13	50	無	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	6827-2
16	享保 5 年 5 月 20 日	1720	西平朝叙靈社起請文	250	298	1.2	漣主体	漣返紙	21	54	有	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	6845-2
17	享保 8 年 5 月 16 日	1723	大城朝章靈社起請文	243	324	1.33	漣主体	漣返紙	18	47	無	少	輕	無	黄蘗染	熊野山	6861-2
18	享保 8 年 5 月 16 日	1723	北谷朝騎靈社起請文	242	300	1.24	漣主体	漣返紙	18	48	無	少	輕	無	黄蘗染	熊野山	6862-2
19	享保 11 年 5 月 16 日	1726	高原安満靈社起請文	209	269	1.29	雁皮主体	漣返紙	22	32	有	有	無			那智瀧	7017-8
20	享保 14 年 正 月 26 日	1729	具志頭文若靈社起請文	225	267	1.19	漣主体	漣返紙	16	35	無	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	7135-2
21	享保 21 年 3 月 6 日	1736	謝名朝栄靈社起請文	208	286	1.38	漣主体	漣返紙	18		無	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	7210-2
22	延享 3 年 3 月 26 日	1746	今帰仁朝昇起請文	253	352	1.39	漣三桎交	漣返紙	24	25	無	有	輕	無	黄蘗染	熊野山	7337-3
23	延享 3 年 3 月 26 日	1746	宜野灣朝雅起請文	253	332	1.31	漣三桎交	漣返紙	24		無	有	輕	無	黄蘗染	熊野山	7338-2
24	文化 9 年 5 月 6 日	1812	小禄良和起請文	218	250	1.15	漣返	漣返紙	19	28	有	有	輕	無	黄蘗染	那智瀧	8006-2
			平均	225	291	1.29			20	36							
			最大値	253	352	1.45			27	54							
			最小値	204	250	1.15			13	25							

表 6 牛玉宝印種別紙質データ集計Ⅱ

牛玉種	枚数	漣返	杉原	米多	米有	米少	米計	米無	土多	土有	土少	土計	土無	打有	打軽	打無	黄蘗	丁子	染有	染計	染無
1 御影堂	23	17	6	9	8	6	23	0	0	2	1	3	20	1	13	9	3	1	1	5	18
2 教王護国寺	2	0	2	0	2	0	2	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	2
3 千手堂	1	1	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0
4 夜叉神	2	2	0	0	0	1	1	1	0	1	1	2	0	0	2	0	1	0	0	1	1
5 熊野山	21	20	1	5	1	4	10	11	0	8	4	12	9	0	20	1	5	2	5	12	9
6 那智瀧	2	2	0	0	0	0	0	2	0	1	0	1	1	0	2	0	1	0	0	1	1
7 金峰山	4	4	0	1	0	1	2	2	0	2	1	3	1	1	3	0	0	1	0	1	3
8 鞍馬寺	3	3	0	0	0	1	1	2	0	1	0	1	2	0	3	0	0	0	1	1	2
9 根本中堂	1	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1
10 日吉七社	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1
11 善通寺	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
12 彦山	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0
13 珍栄寺	1	0	1	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
14 八幡新宮	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1
15 福田寺	1	1	0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1
合計	65	53	12	16	12	17	45	20	1	20	7	28	37	4	49	12	11	4	8	23	42